

大阪商業大学学術情報リポジトリ

ミクロ経済学入門における反復学習に関する一考察

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2018-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 孝, SHIBATA, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/541

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ミクロ経済学入門における 反復学習に関する一考察

柴 田 孝

1. はじめに
2. 担当クラスの受講生の特徴と意識
3. 講義内容の設計と運用方針
4. 平成28年度ミクロ経済学入門での実践事例
5. 考察と今後の課題

1. はじめに

ミクロ経済学入門は、ミクロ経済学という経済学の理論科目の入門として設定されている科目である。しかしながら入門という言葉の一方で、はじめて学習するものにとっては、ミクロ経済学という分野がどういう方法論で何を明らかにしようとするのかも十分にはわかっていないなかで、次々に新しい用語と概念が示され、さらにそれらを一体として理解することが求められるという点で受講生によっては挑戦的な科目となっている。また、学習は段階的に進んでいくが、後段階は前段階の理解のもとに展開されるため、途中でつまずくと、内容を受容することが難しくなるようである。これは学生の取り組み状況やアンケートの回答を観察した筆者の主観であるが、自身も初学者のころに苦労したことを考えれば、そういう可能性も十分にありそうである。そこで、受講生の自主的な取り組みのみにまかせるのではなく、講義方法および教材を工夫することで、ミクロ経済学入門という科目に対する抵抗感を緩和させ、継続的な学習を続けることで、単位修得に導く方向性を目指してこの取り組みを開始した。

2. 担当クラスの受講生の特徴と意識

2016年度後期に〇大学で2年生クラスのミクロ経済学入門を担当した。その際、受講生の属性と意識を確認するためアンケート（資料1）を実施し45名から回答を得た¹⁾。

1) なお初回講義で実施したため、出席者・回答者ともに後半より少ないこと、また数名は履修変更をして離脱している点を補足しておく。

表1：2回目履修者が初回履修時に感じたミクロ経済学入門への感想（自由記述）の集計結果

センテンス・キーワード	該当者数
①難しい	17名
②進度が速い	3名
③説明が難しい・理解できない	12名
④途中からついていけなくなった	2名
⑤専門用語を交えての講義で理解できない部分があった	2名
⑥計算・図（グラフ）・数学的表現に苦手意識がある・わからない	9名
⑦勉強していなかった	3名

注：筆者によりセンテンス・キーワードに該当する回答を抽出した

回答者の属性について、経済学科の受講生が39名と大半を占めている²⁾。また、経済学科の受講生の36名が2回目の受講と回答した。2回目の受講と回答した方に、1回目の履修時に感じたことを自由記述形式で答えてもらったところ、36名から回答を得た。その回答を7項目に分類して、それぞれに該当する回答を集計（複数項目に該当するものはそれぞれに計上している）したものが表1である。

単に「難しい」と答えた回答が最も多くみられ（17件）、次に「説明が難しい・理解できない」に関連するものが12件、「計算・図（グラフ含む）・数学的表現に苦手意識がある・わからない」に関連するものが9件と続く。これらから、講義時には平易な言葉づかいを意識するとともに、講義の進度を抑制的に行う必要性を感じた。また、数学的表現に対する苦手意識が多くみられることも確認できた。

さらに、講義に関する要望事項としてふたたび自由記述形式で答えてもらった項目については29名から回答を得た。テストを簡単にしてほしいなどの直接的な要望もみられたが、多くは「最初に復習をしてほしい（4件）」「わかりやすい説明（5件）」「繰り返しての説明（5件）」であった。

3．講義内容の設計と運用方針

ミクロ経済学入門において、シラバスで定めた到達目標は以下の3点である

- ①需要曲線の形と性質を理解する。
- ②供給曲線の形と性質を理解する。
- ③均衡と余剰を理解する。

すなわち、ミクロ経済学における部分均衡分析について理解し、かつ、部分均衡分析を活用して経済事象の簡単な分析ができることを目指すこととしている。

一方で、2年生クラスの大部分を占める再履修者はすでに科目に対する様々な苦手意識を持っている学生がいることも判明している（表1）。よって教授する内容を絞り込み、でき

2) 経済学科はミクロ経済学入門・マクロ経済学入門を必修としている。

る・わかる感覚を感じてもらい、学習意欲を継続してもらうべきではないかと考えた。

そのために、科目が求める内容について、一定段階進んだところで、確認を兼ねて中間試験を実施することとし、かつそれを複数回実施することとした。これにより、受講者に自分の弱点に気づいてもらうこと、および、その克服は自身による学習以外にないことを気づいてもらうことを目指す。さらに、くり返し挑戦することで、できる・わかる喜びを少しでも感じてもらえればと期待した。

また、講義内容については、具体的には需要曲線と供給曲線による均衡価格、および均衡取引数量の導出、余剰分析の理解ができることを目指した設計にすることとした。さらに数式による表現は回避し、図（グラフ）による説明ができることを目指すよう目標を設定した。

講義計画は同一テーマの内容を 1 クールとして数えた際に 4 クールとなるよう計画した。第 1 クールでは第 1～3 週において、財とは何か、財の取引にかかわる経済主体とはだれか、需要曲線・供給曲線の形状とその性質について講義を行った後、第 4 週に第 1 回中間試験を実施した。なお自分の弱点把握および、全体的にみられた注意点を共有するため、第 2 クール初回である第 5 週に返却・解説を行うこととした。これは以降のクールでも同様である。第 2 クールでは、第 5～7 週において、市場均衡の説明と需要曲線と供給曲線による均衡価格、および均衡取引数量の導出、さらに、条件変化による均衡の変化について講義を行った後、第 8 週に第 2 回中間試験を実施、第 9 週に返却・解説を行った³⁾。第 3 クールでは、第 9～11 週において、余剰概念の説明と各余剰の導出について講義を行った後、第 12 週に第 3 回中間試験を実施、第 13 週に返却・解説を行った。第 4 クールの第 14・15 週では、これまでの総まとめとして課題プリントに取り組み、理解度の向上と弱点克服を目指すこととした。

また、各回で練習問題と講義アンケートを含む A 4 用紙 1 枚分の課題を用意し、講義の最後に取り組み提出させることとした。これにより、よくみられる不正確な記述や誤りを発見し、フィードバックに役立てるようにした。

4．平成28年度ミクロ経済学入門での実践事例

4－1 中間試験実施時のアンケート結果

前節で述べたように中間試験を合計 3 回実施することとしたが、その際に無記名で、①出席回数（自己申告）、②ミクロ経済学入門に関する自宅学習時間、③所属学科を問うアンケートを実施した⁴⁾。それを集計した結果が以下の表 2 である。

3) 最終節の考察で述べるが、今回のように内容ごとに基礎と応用を組み込むか、基礎を先にすべて説明し試験で確認し、その後に応用問題に取り組むという順番が望ましいかは検討する必要がある。

4) このほか、自由記述形式にて中間試験で難しかった点を聞いたが、ほとんど回答はなかったため、この部分については割愛する。

表2：中間試験実施時アンケート集計結果

	回収者数
アンケート1 (第4週実施：中間試験第1回)	59名
アンケート2 (第8週実施：中間試験第2回)	62名
アンケート3 (第12週実施：中間試験第3回)	61名

	出席率			
	75%超	75%以下	50%以下	25%以下
アンケート1	29名 (49%)	15名 (25%)	12名 (20%)	3名 (5%)
アンケート2	38名 (61%)	16名 (26%)	5名 (8%)	3名 (5%)
アンケート3	38名 (62%)	16名 (26%)	2名 (3%)	5名 (3%)

	1週間あたりのこの科目のための自宅学習時間				
	30分以上	30分未満	15分未満	まったくして いない	回答なし
アンケート1	3名 (5%)	8名 (14%)	21名 (36%)	26名 (44%)	3名 (5%)
アンケート2	4名 (6%)	9名 (15%)	17名 (27%)	31名 (50%)	1名 (2%)
アンケート3	4名 (7%)	9名 (15%)	23名 (38%)	25名 (41%)	0名 (5%)

	所属学部		
	経済学部	総合経営学部	回答なし
アンケート1	52名 (88%)	7名 (12%)	0名 (0%)
アンケート2	53名 (85%)	9名 (15%)	0名 (0%)
アンケート3	51名 (84%)	9名 (15%)	1名 (2%)

注：カッコ内の数値は各回答の選択者が回収者数に占める割合

当初のアンケート通り、主たる受講生は経済学部学生である。また、出席回数は自己申告によるものであるが、第2回アンケート・第3回アンケートで回数の内訳に変化はあるが、75%を超える出席のものが60%強となっており、出席する学生は継続して出席し続ける傾向がみられる。一週間あたりこの科目のための自宅学習時間については、これも比率が安定的であり、受験者の6割が少しは時間を割いて復習等に取り組んでいる一方で、まったくしていないとの回答が4割を占めるとするのは、いささか残念な結果であった。

4-2 中間試験・学年末試験の出題形式について

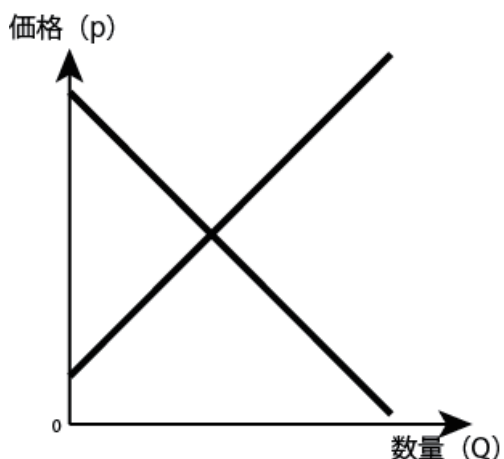
中間試験を通じて、受講生の内容理解度の推移を測定するため、出題時の形式を統一することを試みた。ただし、授業内の限られた時間で実施できること、スキャナで読み取ってデータ保存をおこなうために使用できる用紙サイズがA4両面に限定されること、などの制約から、同じ問題を繰り返し出題するもの、条件を若干変更して出題しているものなどの範囲で出題している。なお、今年度は効果測定のため、学年末試験も同等の形式で出題している。問題は以下のカテゴリーから出題した。出題形式は図1を基本として、たとえば「③需

表 3：中間試験・学年末試験での出題内容

問題の分類	中間 1	中間 2	中間 3	学年末
①財の取引における買い手と売り手の判別	○	○	○	○
②限界費用と供給量	○	×	×	×
③需要曲線・供給曲線の判別	○	○	○	○
④所与の価格に対する需要量の導出	○	○	×	○
⑤所与の価格に対する供給量の導出	○	○	○	○
⑥価格弾力性の異なる需要曲線の描画	○	×	×	○
⑦買い手が増加した場合のグラフ表現（需要曲線のシフト）	○	○	×	○
⑧売り手が増加した場合のグラフ表現（供給曲線のシフト）	○	○	○	○
⑨限界費用が減少した場合のグラフ表現（供給曲線のシフト）	-	×	○	×
⑩購入の有無から推測する支払意思額についての説明	○	×	×	○
⑪均衡価格・均衡取引量のグラフ上での表現	-	○	○	○
⑫買い手・売り手の増加と均衡変化	-	○	○	○
⑬買い手・売り手の増加と消費者余剰の変化	-	-	○	○
⑭買い手・売り手の増加と生産者余剰の変化	-	-	○	○
⑮買い手・売り手の増加と総余剰の変化	-	-	○	○

注：○は出題あり、×は出題なし、-は当該時点で未修得範囲を表す。

図 1：出題に用いた基本図



要曲線・供給曲線の判別問題」ならば、図のそれぞれの曲線が何かを答えさせる問題、「⑦買い手が増加した場合のグラフ表現」ならば、図がどう変化するかを記述させる問題、「⑪均衡価格・均衡取引量のグラフ上での表現」では、図に均衡価格・均衡取引量を明示させる問題、「⑫買い手・売り手の増加と均衡変化」では、⑦と⑪の両方が理解できているかを図に書き入れることで判定する方法をとった。

4-3 中間試験・学年末試験での正答率の推移

続いて、各回の中間試験および学年末試験での正答率を表したものが表4である。このうち、繰り返し出題して理解度を確認した重点項目について推移を確認できるよう一覧表にしたものが表5である。

表4：各回の中間試験および学年末試験の受験者数と正答率

(1) 第1回中間試験(第4週:2016年10月17日実施)

受験者数:60名

	設問番号	正答率
①財の取引における買い手と売り手の判別	1	96.70%
	2	98.30%
	3	73.30%
②限界費用と供給量	4	43.30%
③需要曲線・供給曲線の判別	5	46.70%
④所与の価格に対する需要量の導出	6	6.70%
⑤所与の価格に対する供給量の導出	7	6.70%
⑥価格弾力性の異なる需要曲線の描画	8	11.70%
⑦買い手が増加した場合のグラフ表現(需要曲線のシフト)	9	26.70%
⑧売り手が増加した場合のグラフ表現(供給曲線のシフト)	10	18.30%
⑩購入の有無から推測する支払意思額についての説明	11	65.00%

(2) 第2回中間試験(第8週:2016年11月14日実施)

受験者数:63名

	設問番号	正答率
①財の取引における買い手と売り手の判別	1	98.40%
	2	71.40%
③需要曲線・供給曲線の判別	3	82.50%
④所与の価格に対する需要量の導出	4	52.40%
⑤所与の価格に対する供給量の導出	5	31.70%
⑦買い手が増加した場合のグラフ表現(需要曲線のシフト)	6	69.80%
⑧売り手が増加した場合のグラフ表現(供給曲線のシフト)	7	38.10%
⑪均衡価格・均衡取引量のグラフ上での表現	8	73.00%
⑫売り手の増加と均衡変化	9	27.00%

(2) 第3回中間試験（第12週：2016年12月12日実施）

受験者数：62名

	設問番号	正答率
①財の取引における買い手と売り手の判別	1	83.90%
	2	95.20%
③需要曲線・供給曲線の判別	3	79.00%
⑤所与の価格に対する供給量の導出	4	50.00%
⑧売り手が増加した場合のグラフ表現（供給曲線のシフト）	5	40.30%
⑨限界費用が減少した場合のグラフ表現（供給曲線のシフト）	6	46.80%
⑩均衡価格・均衡取引量のグラフ上での表現	7	77.40%
⑪売り手の増加と均衡変化	8	38.70%
⑬売り手の増加と消費者余剰の変化	9	25.80%

⑭売り手の増加と生産者余剰の変化	10	27.40%
⑮売り手の増加と総余剰の変化	11	25.80%

(4) 学年末試験（2017年1月30日実施）

受験者数：68名

	設問番号	正答率
①財の取引における買い手と売り手の判別	1	98.50%
	2	100.00%
	3	82.40%
	4	98.50%
	5	89.70%
	6	95.60%
⑩購入の有無から推測する支払意思額についての説明	7	92.60%
③需要曲線・供給曲線の判別	8	95.60%
④所与の価格に対する需要量の導出	9	76.50%
⑤所与の価格に対する供給量の導出	10	73.50%
⑥価格弾力性の異なる需要曲線の描画	11	54.40%
⑦買い手が増加した場合のグラフ表現（需要曲線のシフト）	12	83.80%
⑧売り手が増加した場合のグラフ表現（供給曲線のシフト）	13	77.90%
⑩均衡価格・均衡取引量のグラフ上での表現	14	98.50%
⑪買い手の増加と均衡変化	15	77.90%
⑬買い手の増加と消費者余剰の変化	16	73.50%
⑭買い手の増加と生産者余剰の変化	17	70.60%
⑮買い手の増加と総余剰の変化	19	72.10%

注：学年末試験の設問番号18番は政府余剰について問う問題であったが、課税・補助金を取り扱っていないために余剰はゼロであり変化しないこと、ならびに中間試験では出題していないために表から除外した。

表5：中間試験・学年末試験での設問ごとの正答率の推移

	中間試験			学年末試験
	第1回	第2回	第3回	
③需要曲線・供給曲線の判別	46.70%	82.50%	79.00%	95.60%
④所与の価格に対する需要量の導出	6.70%	52.40%		73.50%
⑤所与の価格に対する供給量の導出	6.70%	31.70%	50.00%	76.50%
⑦買い手が増加した場合のグラフ表現	26.30%	69.80%		83.80%
⑧売り手が増加した場合のグラフ表現	18.30%	27.00%	40.30%	77.90%
⑪均衡価格・均衡取引量のグラフ上での表現		73.00%	77.40%	98.50%
⑫買い手の増加と均衡変化				77.90%
売り手の増加と均衡変化		27.00%	38.70%	
⑬買い手の増加と消費者余剰の変化				73.50%
売り手の増加と消費者余剰の変化			25.80%	
⑭買い手の増加と生産者余剰の変化				70.60%
売り手の増加と生産者余剰の変化			27.40%	
⑮買い手の増加と総余剰の変化				72.10%
売り手の増加と総余剰の変化			25.80%	

表5について、以下のようにまとめることができる。

- (1) 初めて学ぶ概念を再現することは難しい（正答率が低い）ものの、繰り返し同じ問題を解くことにより正答率が上昇する⁵⁾。
- (2) 買い手（需要側）に関する変化のほうが理解しやすく正答率も高くなる傾向にあるが、売り手（供給側）に関する変化は「量の変化を表す横方向の変化」と「費用条件の変化を表す縦方向の変化」のどちらも講義で紹介したことで、どちらを選ぶべきか混乱がみられ、正答率も低くなっている。
- (3) 与えられた条件が変化したことを受けて均衡・余剰がどのように変化するかを示す問題では、学年末試験の時点で均衡変化の正答率78%と比較して、余剰変化の正答率が71～73%と若干低くなっている。

4-4 問題演習用課題プリントの作成

中間試験第1回から第3回までの結果をふまえて、授業内での講義プリントならびに確認用課題プリントでの学習だけでは、合格水準に到達することが困難な受講生が一定数発生する可能性があることが予想された。そこで、問題演習用課題プリントを作成し、講義内で取り組むように配布した。なお、作成したプリントはA4サイズ1枚のものの合計10種類である⁶⁾。この課題プリントを作成した意図は、(1)当初から復習を促していたものの、受講生が実際にどの程度またどのように復習をしているかがわかっていないこと、(2)グラフによる表現を中心

5) ①の財の取引における買い手と売り手を判別する問題では、労働サービスの取引およびB2B取引のケースにおいて70%台と若干低くなったものの、それ以外の日常的な事例では第1回中間試験から9割を超える正答率であった。

6) 参考として配布した問題演習用課題プリントを2種類末尾に添付している（資料2・3）。

表 6：問題演習プリントの取り組み状況（1枚以上）

	第 7 週	第11週	第12週	第15週
プリント提出人数	19名	54名	47名	53名
出席者数	66名	54名	62名	57名

としているため、作図を自分でできるようになることを求めているが、それができるようになるためには、繰り返し自分で作図することが必要であると説明してきたが、復習同様、どこまで取り組んでもらえているかがわからないこと、の2つの課題を解消するためである。手を動かして作図することを繰り返すと理解度が高まるので頑張ってもらおうと呼びかけるだけではなく、実際に記入するワークシートを用意することで、受講生が復習に取り組みやすくするとともに、授業支援システムに掲載することで各自が印刷して繰り返し取り組むことのできる環境を用意することが狙いである。なお、受講生に利用してもらう中で、問題演習プリントとしての改善点を把握しなかったために、取り組むインセンティブとして、取り組むことで若干の加点の対象とすることを通知した。

第 7 週講義時に 2 種類、第11週講義時に 3 種類、第12週講義時には 6 種類、第15週講義時には 9 種類を用意し、取り組む枚数は各自に委ねた。各回の終了時に確認のため、回収し記録したところ、各回で 1 枚以上取り組んだ人数は表 6 の通りである。

4－5 学年末試験時のアンケート調査

中間試験実施時と同様に学年末試験でも、無記名で、①出席回数、②ミクロ経済学入門に関する自宅学習時間、③講義中課題プリントに対する評価、④自宅学習プリントに対する評価、⑤所属学科を問うアンケートを実施した⁷⁾。それを集計した結果が以下の表 7 である。

この科目のための自宅学習時間については、「全くしない」が減少し、「30分未満」と「30分以上」が中間試験時よりも増加している。また、講義中課題プリントが役に立ったかという設問についても、「とてもそう思う」との回答が61%であった。自宅学習プリントについては、実際の取り組み状況のデータがないため、この数字をそのまま受け入れることが適切ではない可能性があるが、30%弱の学生に役に立つとの評価を得た。

5．考察と今後の課題

ここまで見てきたように、学生の理解度向上には反復学習が有効であることが示唆されており、基礎科目の学習において一般に必要と考えられていることを補強する事実であると考ええる。

受講生に対するアンケートで「科目に要望すること」を自由記述形式で聞いた際に、「復

7) このほか、自由記述形式にて中間試験で難しかった点を聞いたが、ほとんど回答はなかったため、この部分については割愛する。

表7：学年末試験実施時アンケート集計結果

出席回数			
10～15回	5～9回	0～4回	回答なし
58名(84%)	10名(14%)	0名(0%)	1名(1%)

1週間あたりのこの科目のための自宅学習時間				
30分以上	30分未満	15分未満	まったくして いない	回答なし
17名(25%)	16名(23%)	18名(26%)	17名(25%)	1名(1%)

講義中プリントは役立ったか				
とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない	取り組んでない	回答なし
42名(61%)	25名(36%)	0名(0%)	1名(1%)	1名(1%)

自宅学習プリントは役立ったか				
とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない	取り組んでない	回答なし
20名(29%)	35名(51%)	0名(0%)	13名(19%)	1名(1%)

所属学部		
経済学部	総合経営学部	回答なし
57名(83%)	10名(14%)	2名(3%)

注：カッコ内の数値は各回答の選択者が回収者数に占める割合

習をしてほしい」「問題プリントがほしい」「定期試験前にまとめをしてほしい」などの要望が必ず出る。こうした要望に対して筆者は、受講生本人が普段から復習をし、理解が十分でない点があれば、その都度、質問をするなど理解度向上に取り組むことが望ましい姿勢であると考えてきた。しかしながら、授業外での学習時間に対するアンケート(表2)でみたように、アンケート回答者中、自宅学習時間15分未満が約8割という現状をふまえれば、毎回の講義開始時における復習の時間や問題演習を取り入れることにより、理解できずにあきらめる層をつなぎとめる工夫などは必要であり、かつそうした方向に講義方法を修正してきたことは有効であったと考える。また最終14・15週でこれまでの要素をふりかえる演習プリントを用意したが、持ち帰り自宅で取り組む学生も少数とはいえ現れており、その点は持ち帰り用に大目に用意した甲斐があったといえる。その他、各回の問題演習(1問)においてグラフで表現する問題を課し講義終了前に取り組ませたが、提出する際に発見できた丁寧でない回答や不正確な回答に関しては、席に戻らせ再度取り組ませてきた点も大切な取り組みであったと考えている。

十分ではなかった点として、中間試験等で使用した出題形式を定期試験にも用いたことで、結果的にどういう問題が出るか予想できるようになっていたことが挙げられる。もちろん、どの変化のパターンを出題するかというのは事前には公表していないが、理解度が相対的に高かったパターンを出題したこともあり、定期試験での正答率が高まったということは

事実である。

しかしながら、それでもなお、条件変化の問題（応用）での正答率が基準状態（基礎）での正答率と比べて下がるという事実をみれば、取り組みがまだ不十分である。特に講義期間の第3クール（9～11週）という終盤で新たに組み込んだ内容（余剰概念）に対する理解度を高めるためには、現在の方針である ①需要曲線・供給曲線の理解 ②均衡の表現と条件変化による均衡の変化 ③余剰概念の表現と条件変化による余剰の変化、という組み立てを変更する方向性が考えられる。現在の②および③では基礎（需要供給曲線の図にどう表現するか）と応用（条件変化が起こった場合どう変わるか）とが混在するようになっている。これには応用を通じて、基礎で学んだことの理解度を深める狙いがあるが、逆に③の内容についての理解不足を補う時間が②で取り扱う内容に比べて不足している可能性がある。これを改めて、②'均衡の表現、③'余剰概念の表現、④条件変化による均衡と余剰の変化、というように、①②'③'までを前半で終了し、④を後半として、基礎と応用に分けることで余剰概念に対する理解度を高める時間を確保するという組み立てが考えられる。しかしながら、この方向性が有益な改善となるかは検証できていないため、今後の課題としたい。

〔謝辞〕本稿は「経済学部基礎科目（マクロ経済学入門・ミクロ経済学入門）の理解度深化に向けて受講者による自主学習を促進する教材の研究開発」平成27/28年度大阪商業大学教育奨励助成費による成果である。

資料1：ミクロ経済学入門におけるアンケート質問項目一覧

(1) 第1週実施アンケート

質問1：あなたはこの科目「ミクロ経済学入門」を履修するのは初めてですか？「はい」か「いいえ」でお答えください。(2択)

質問2：「いいえ」(2回目の履修)を選んだ方のみにお聞きます。この科目「ミクロ経済学入門」を1回目に履修したときに感じたことを教えてください。(自由記述)

質問3：あなたがこの科目「ミクロ経済学入門」を履修するにあたって、特に15回の講義についてどのような要望がありますか？必ず実現するとは約束できませんが、可能なことは取り入れていきたいので、あなたの要望を教えてください。(自由記述)

質問4：あなたの所属を教えてください。(学科選択)

(2) 第4週 (中間試験第1回) 実施アンケート

質問1：この講義「ミクロ経済学入門」で出席した回のチェックボックスに☑をつけてください。(第3週までの該当する出席回を各自でマーク)

質問2：1週間あたり、この講義のために自宅学習 (予習・復習を含む) をどれくらいしましたか

(選択肢) まったくしていない ・ 15分未満 ・ 15～30分 ・ 30分以上

質問3：第1回中間試験で特に関連した部分を具体的に教えてください (自由記述)。

質問4：あなたの所属を教えてください。(学科選択)

(3) 第8週 (中間試験第2回) 実施アンケート

質問1：この講義「ミクロ経済学入門」で出席した回のチェックボックスに☑をつけてください。(第8週までの該当する出席回を各自でマーク)

質問2：1週間あたり、この講義のために自宅学習 (予習・復習を含む) をどれくらいしましたか

(選択肢) まったくしていない ・ 15分未満 ・ 15～30分 ・ 30分以上

質問3：第1回中間試験で特に関連した部分を具体的に教えてください (自由記述)。

質問4：あなたの所属を教えてください。(学科選択)

(4) 第12週 (中間試験第3回) 実施アンケート

質問1：この講義「ミクロ経済学入門」で出席した回のチェックボックスに☑をつけてください。(第12週までの該当する出席回を各自でマーク)

質問2：1週間あたり、この講義のために自宅学習 (予習・復習を含む) をどれくらいしましたか

(選択肢) まったくしていない ・ 15分未満 ・ 15～30分 ・ 30分以上

質問3：第2回中間試験で特に関連した部分を具体的に教えてください (自由記述)。

質問4：あなたの所属を教えてください。(学科選択)

(5) 学年末試験時実施アンケート

質問1：この講義「ミクロ経済学入門」で出席した回のチェックボックスに☑をつけてください。

(選択肢) 0～4回 ・ 5～9回 ・ 10～15回

質問2：1週間あたり、この講義のために自宅学習 (予習・復習を含む) をどれくらいしましたか

(選択肢) まったくしていない ・ 15分未満 ・ 15～30分 ・ 30分以上

質問3：講義中課題プリントは理解度の向上に役立ちましたか

(選択肢) 取り組んでいない ・ そう思わない ・ まあそう思う ・ とてもそう思う

質問4：自宅学習プリントは理解度の向上に役立ちましたか

(選択肢) 取り組んでいない ・ そう思わない ・ まあそう思う ・ とてもそう思う

質問5：この講義で特に関連した部分を具体的に教えてください (自由記述)。

質問6：あなたの所属を教えてください。(学科選択)

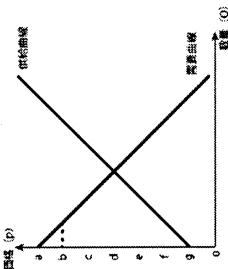
資料2：問題演習課題プリント①所与の価格からの需要量の導出

ミクロ経済学入門 問題① 問題を解いた日⇒〔 月 日 〕 (年) (クラス) (番) (氏名:)

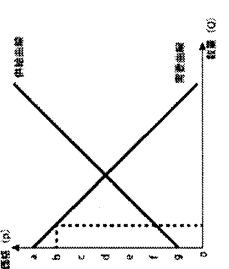
〔 解き方 〕

問題：価格がbであるときの需要量を求めなさい。

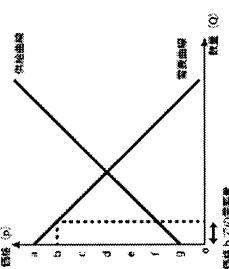
①価格bから需要曲線に向かって水平に補助線を引く



②需要曲線に到達したら、そこから垂直に補助線を横軸まで引く



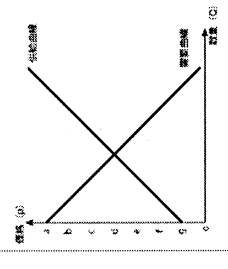
③原点 (0) から「補助線が横軸と交わった点」までの長さが求める需要量



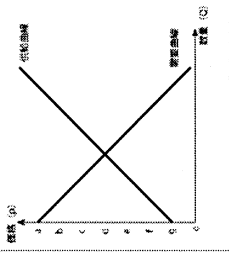
問題演習・・・できれば左を見ずに解く

問題：価格がeであるときの需要量を求めなさい。

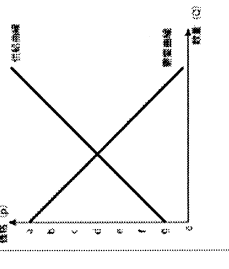
①価格eから需要曲線に向かって水平に補助線を引く



②需要曲線に到達したら、そこから垂直に補助線を横軸まで引く



③原点 (0) から「補助線が横軸と交わった点」までの長さが求める需要量



資料3：問題演習課題プリント②初期条件の変化がもたらす余剰の変化

